

● 看護学部のなかの、男性教員として、教養系教員として ●

— 性を意識せずに関わる —

池田 雅則先生（兵庫県立大学看護学部准教授）

2003年 東京大学教育学部卒

2011年 東京大学大学院教育学研究科修了 博士（教育学）

全学教職課程を担当するとともに、看護学部では養護教諭養成や教養教育に携わる。専門は近世末期から近代初期の日本教育史。「大津市立中学校におけるいじめに関する第三者委員会」の調査員や看護系の諸施設での教育学関連の研修の講師を務めたりもしている。



米谷淳（以下、米谷）：最初に、先生がなぜ教育学を志し、教員になられたかをお話ください。

池田雅則（以下、池田）：わたしの歩みは世間的にみれば非常に順調で、現役で東京大学に入学しました。大学に入ってから特に壁にぶつかるようなこともなかったのですが、大学の授業やゼミを通して自らの育ちについて考えるきっかけがいくつかありました。ひとつは、ジェンダー論の授業でして性が男女の2つではなく、2のn乗だけありえるということに気づかされたことです。もうひとつは、文化や価値観の同一性を帯びた「国民」が学校を通してつくられるという議論に触れたことです。まさに自分は、たくさんのものを人からいただいた一方で、誰かが意図したことを要領よく身につけた存在で、そして得たものは必ずしも自分の意思で得たものだけでなく、無意識に身につけた習慣、考え方、価値観があったと気づきました。それで、どうやって人っていうのはつくられていくのだろうかという観点から、教育学というのをやってみようかなと思いました。さらに、もともとは歴史が好きだったので、好きなことと課題を重ねるような形で教育の歴史を勉強しました。

米谷：以前、ある大学へ「教師論」の集中講義に行ったことがあります。授業準備をしていて師範学校の歴史がおもしろいと思いましたが、ご興味はありますか。

池田：もちろん興味があります。歴史的に言えば寺子屋とかそのお師匠さんが教えていた時代というのは人間的な一対一の濃密なかかわりが特徴的ですよ。それが近代学校の時代になってくると、1人の先生が前に立って、生徒が対面して座っており、師弟の距離が離れてきますね。あと江戸の教育の場は、統治者としての学問が義務づけられたお侍の学校藩校は別にして、民間の塾は誰からも命じられたり縛られたりすることなく学問を求める人々が通っていました。教室に集権国家の考え方が否応なく入ってくる近代学校と大きく異なります。

米谷：その私塾の研究などの研究から今の大学教員とか、ティーチングに関して、お話できることはありますか。

池田：そうですね、あまり実践に関わらないかもしれませんが、けれど、学問を求める若者

それぞれのニーズや興味に即した教育を提供していたという点では共通しているかもしれませんがね。わたしは全学の教職課程を担当し、看護学部では養護教諭の養成をしています。さらに教職専門科目だけではなく、教養的な科目も担当しています。兵庫県立大学全学部の学生を教えている数少ない教員です。やり方としては、対面の講義やゼミのほかに遠隔授業も行っています。



元喫茶店の貸スペースでのジョブカフェに参加しました

米谷：遠隔授業のシステムはどうなっていますか。

池田：兵庫県立大学はキャンパスが多く、地理的にも離れています。例えば、わたしが所属する看護学部は明石のキャンパスですが、他には、神戸、姫路や西播磨などにもキャンパスがあります。科目の共有というだけにとどまらない、キャンパス間交流としての意味もあって遠隔授業が導入されていると理解しています。

米谷：それはいつぐらいから始まりましたか。

池田：兵庫県立大学になった時からです。

米谷：課題はありますか。

池田：そうですね。高額な通信設備を設置することを考えるからでしょうか。設備は専用教室ではなく、大教室に設置されます。すると他の授業との時間調整が難しくなります。

米谷：オペレーターは別につけますか。

池田：受信側には、大学院生のTAを置いて操作をお願いしています。来年度からは送信側にもTAを置くみたいです。今のシステムは、こちらからもカメラの操作や、画像への書き込みはできますし、質問を受けて、そのまま返すこともできます。三元中継もできるシステムです。

米谷：遠隔授業が長く継続されているのは、順調だということですね。

池田：ともいえないです（笑）。それはやはり試行錯誤があって、これまでもトラブルが多くありました。システムが30分ぐらい止まっちゃったり、さらに再起動が必要になったり。更新の度に改善はされていますが。交流という意義の下で担当者の声を受けながら、なんとかがんばっているというところですね。

授業のやり方については、板書が課題でした。遠隔でやった初めての授業では、資料の情報が不足していたため、補足することを黒板にたくさん書きました。しかし拡大縮小の操作が繰り返されたり画像が粗かったりして、字が小さくて見えないという苦情がありました。翌年からはパワーポイントと大きい字で投影資料を作成することにしました。対面の場合は手書きの板書やOHPの使用でも効果的だけれど、

遠隔システムでは方法を変えたほうが良いですね。

米谷：まさにそれはメディアの問題ですよ。

池田：ええ。初めての年では送信側教室と受信側教室とで授業評価の点数が1点ぐらい差が出ました。今では、あまり差がなくなりました。

また、もうひとつ意識しているのはリアクションも口調も文字も全てオーバーにすることです。もともと学生との距離ができないように、教壇の後ろに立たず、動きながら授業をしていたのですが、よりオーバーにするようになりました。

加えて、これは対面、遠隔には限らないのですが、なるべくグループワークをしてもらっています。200人の学生でもやります。200人もいると「ふり」をして真剣に取り組まない学生もいます。これを防ぐためにグループを作らせた後にグループ単位の出席票を渡します。ですので、グループを作らない学生は出席扱いになりません。

米谷：それはおもしろいですね。

池田：人数が合わずあぶれた学生が、必死になって別の仲間や性別が違う人と組みます。すると今まで話さなかった人と緊張感をもって意見を交流し、刺激を受けるようです。あと教養科目の最終レポートでもグループワークの機会を導入しています。共同作成を可にしています。それで共同で作成した場合は加点をします。「ただ乗り」を防ぐため、学生それぞれの分担を明記させる自己評価シートと一緒に綴じさせます。そして果たした役割に応じて評価を与えています。教員からの評価だけでなく、お互いにも評価し合うシステムです。このやり方をとると、学生たちは友人に迷惑をかけまいと頑張ります。ひとりで書くよりも教育効果が高いと実感しています。何より私にとってもうれしい。レポートの質が向上し量が減少するからです（笑）。

米谷：教職の科目はいくつありますか。

池田：遠隔授業では何科目もありますね。わたしは教育課程論というのをやりますが、他に教育原論、教育心理学、生徒指導論とかもあります。

米谷：養護教諭の資格というのは、4年間の看護学部での学びで取得するものですよ。

池田：そうです。看護師や保健師になるための勉強を教職に必要な専門知識としても読むことができるためです。それに加えて教育学関係の科目が必要です。看護学部の定員は100人ですが、教職は10人に限り希望をとっています。わたしは看護学部では、教職以外にも1回生向けのコミュニケーション論という科目も持っています。

米谷：コミュニケーション論では、実習、演習的なものも入れていますか。

池田：はい。理論的なところも話しつつ、後半で実践的なことを入れています。関わり方の話題では、若い女性のコミュニケーションの特徴を紹介します。若い女性ほどコミュニケーションに積極的である一方、多くの情報ツールに束縛されがちだという傾向が見えます。ここは女性がほとんどなので、あなたたちのコミュニケーションは客観的に見て特殊性があると説明します。ハリネズミのジレンマなども取り上げます。それから感情労働やその結末としてのバーンアウトも扱いました。バーンア

ウトといえば、教養科目の教育学の授業では今年、働き過ぎでバーンアウトした人やサポートが受けられない人の話を聞くといった授業を実施しました。看護の学生も多く出ている授業なので、仕事の質が重すぎて精神障害を発症してしまった元精神衛生福祉士の人をお呼びして話をしてもらいました。そこから自らのキャリアデザインも考えてほしいです。かっちりカリキュラムが決まっている看護系の専門科目の授業とは違って、教養の科目ではいろいろと工夫ができます。

米谷：それは夢ありますね。社会人入学の学生についてはどうですか。

池田：そうですね。やはり社会人入学の学生のほうが意欲は高いですね。高校生から入ってきた学生だと、勉強しているうちに自分の目標を見失ってしまうところがあるようです。社会経験が浅いので、知識や技術を身につけることに精一杯で、自分の将来像に結びつけて学習の意味を想像しづらいようです。その結果、やらされている一本だけになってしまうことがあります。あと、最近聞くのは、やはり経済的な問題でバイトをしなくちゃいけないという学生が増えていることです。

米谷：今は二層ですね。そして若い学生は余裕がなくなっているのです。社会人の指導についてはいかがですか。

池田：成人の学習は難しいところもあります。看護は、いろいろな人の価値観に添いながら働く職業だと思うので、自分が社会人経験を通して培ってきた志、こだわりや価値観への想いが強過ぎると他者の考え方や生き方に寄り添うことができず、自分の主張が表に出すぎて失敗することがあるようです。

米谷：そういう意味では社会経験なしで看護教育を受け、インターンを経て育っていくほうがやりやすいですか。

池田：特に教育する側はそうなのかなと思います。余談ですが、わたしは、ここ何年間か神大病院の看護部でも講義をやっています。成人教育と、研修の作り方というコマです。臨床でも社会人経験を経た新人看護師への指導に困難を抱えているようです。

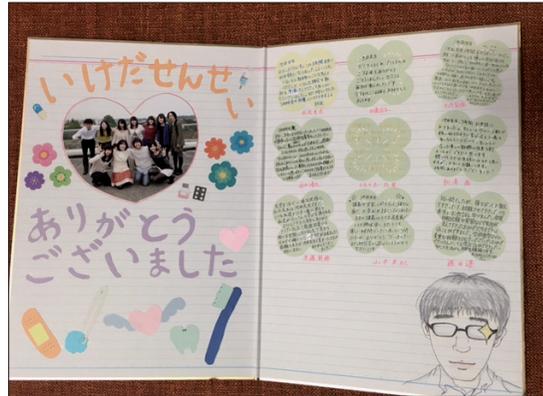
米谷：そうですね。最後に先生が大学教員として、特に女性の若手の教員や研究者になにかメッセージを送っていただけますか。

池田：わたしなりに考えてみたのですが、学生との関わりで言ったら、性別に関係なく一人一人の悩んでいることだとか必要としていることに寄り添うというのが、ベースなのかなと思います。その上で女性、男性、LGBT等の性に添っていくことだと思います。だから、基本は一人一人の学生、指導生が求めていることをしっかり聞き出し、それに応じた指導をつくっていくことがスタートでしょうか。ここは95%ぐらいが女子学生で、教員も8割以上が女性です。もちろん同僚についても女性としてではなく、同僚としてかかわっています。女子学生に向けては、女性が持つような課題についても理解するように話を聞いています。

米谷：先生は教育学者ですから教育的な要素をどのように看護教育に取り入れていますか。

池田：現在、ここに来たおかげでしょうか、生涯学習の観点から女性の医療職のキャリア

形成の研究をしています。例えば看護師という職業で生きているとしても、どうしても人の一生の中では子育てをする時期だとかが含まれてくると思います。そのようなみんなの悩みの具体性や、やりくりする調整方法が情報として十分に共有できていないと思います。そこで必要なのが



教職の学生からの卒業プレゼントです

ロールモデルですが、今必要なのは、キャリアを中断せず看護の道に突き進んだスーパーな看護師のモデルではなく、「わたしはこうあってもいいのだ」というような形のロールモデルの提示だと思います。

米谷: 困っているながらも何とかしようとした体験を持つ人が、大事なモデルになりますね。

池田: ええ。困っているという声を活字化、意味づけし、伝えることが大事だと思います。わたしが指導し、養護教諭になった卒業生も同じような問題を抱えているわけです。そこでわたしの教え子が集まっていゆるジョブカフェみたいなものを始めました。

米谷: ああ、おもしろいですね。現実的なモデルをお互いが共有できますね。

池田: ええ。だけど、ばらばらで悩んで愚痴って終わらせるのではなくて、それぞれで実現可能な目標を立て合うのです。ある程度同じ職とか同じようなことをやっている人が集まってやるとうまくいきます。けれど近過ぎると話せないこともあるようです。

また、最近是在宅看護だとかの比重が大きくなっているようで、病棟での経験がある方が移行してくるそうです。看護の知識とか専門性を生かして、保育関係の起業をする卒業生も出てきているそうです。つまり看護職のキャリアモデルが多様になっています。そこで、年に1回、卒業生を招いたキャリアセミナーを実施し、看護師、助産師、養護教諭、保健師、起業家、大学院生に話してもらっています。

米谷: いいですね。もう一点質問しますが、看護学部は女性が多数で、池田先生はマイノリティになりますが、何か気づくことはありますか。

池田: まずは、なるべく清潔な風(笑)でいようと思っています。シャツはぴんとしておこうとか、ひげを生やさないようにしようとか(笑)。見た目と距離を置かれてしまっっては、そのあとの相談にもつながりません。

米谷: そういうことは大事な心がけですね。そうか、清潔感ね。

池田: また、何年間か働いてきて、わたしが男性であることがいい意味で緩衝材的になっているのかなと感じています。その理由の一つには、看護専門の女性教員と学生は

先輩と後輩であり、教員同士は上司と部下でもあります。下の者は弱みを見せられないのかもしれませんが。資格に関わる分野ですので、評価の拘束力は他より強固にならざるを得ません。だから、看護師でもない自分に相談があるのだと思います。例えば、わたしが具体的なアドバイスをできなくても、悩みを口に出す機会を与えるという意味では、逃げ場というか緩衝材にはなっているのかなと思います。加えてわたしは、座学の科目だけでなく、養護教諭養成課程で演習や実習を受け持っていて、実習する学生の気持ちも理解してくれそうだとされているからかもしれません。

米谷：そのような利害が直接関係ないポジションはすごく大事な役割ですね。

池田：はい。専門の教員一色だと組織って窮屈になるので、別のキャリアと専門性を持つ教養教育の教員の存在は大切だと思います。わたしはたまたまこの組織に置かれたけれど、結果的には有効に働いているのかなと思ったりもします。

米谷：最初のうちは、女性との距離のとり方に苦労しませんでしたか。

池田：難しいです。女性は、男性よりも感情が豊かで表面に出やすいので、時には、琴線に触れる言葉がけをした際に目の前で涙を流す学生もいます。たとえ女子学生に問題があるとしても、最初のうちはわたし自身が引いてしまい、強く指導をできずになんとなく許してしまうところがありました。でも最近は、動じなくなりました。これは周囲の女性教員の指導に学ばせてもらったところです。最初のうち、たじろいでしまっていたのは、女性という目で学生を見てた部分がすごく強かったからだだと思います。もちろん権力を持った教員として使ってはいけない言葉や、かわり方はありますけれど、最近は自然に性別をこえて一人一人の学生とかかわれるようにはなってきたのかなと思います。

米谷：興味深いお話をありがとうございました。

(インタビュー実施日：平成29年1月12日)